

『集合！』

きくたけ か こ
菊武加庫

8,784 文字

あらすじ

師走もおしせまっているというのに、十日以上も口をきかないままの夫婦。
きっかけがないまま一年で最後から二番目の日曜日が過ぎようとしている。

もう十日も口をきいていない。

こんなことは初めてだ。休みというのに、稔は奥の部屋から出てこようもしない。知らぬ顔をきめていればいいといっても、口をきかない相手と狭い家に続けるのは、結構なストレスだ。

先日離婚した、友人の春香の話はホラーだった。

狭いマンションで何か月も話さず、どうしても必要な用件は、メモで箇条書きにして伝えていたというのだ。未央にしたら、叫びだしたくらい恐ろしい話だ。

メールやラインは、相手の言葉が自分の持ち物に侵入して、痕跡を残す。その方法は、生理的に受け入れがたくなったというのだ。

後で万が一、法的にこじれたときに、ラインやメールは証拠になる。残した方がよさそうだが、とにかく自分の生活から、削除したかったらしいのだ。

「もう、なにもかもが嫌だったのね。今？ 自由よ。のびのびしてる」

春香はカラカラと笑った。笑って旅立った。

信じられない種類の予防接種を受け、ほふく前進の講習を受け、紛争くすぶるアフリカの、なんとかという国で教師をするために。

さておき、自分の小さい世界の話だ。未央にはそんな気力はない。耐えられそうにない、と思う。そんな状態が続いたら、耐えられずにどうでもいい話を切り出してしまいそうだ。良い天気ねとか、今日、コンビニにパトカーがいたわよ、とか。

しかし、今は声をかけたくない。きっかけを見いだせないまま、一年で最後から二番目の日曜日が過ぎてゆく。

夫婦の間に不穏な空気が流れ始めたのは、先月、十一月の終わりごろからだった。爆発の兆しが、日増しに確信に変わっていくことに、気づきながら目をそらしていた。説明しても、そんなことかと、きっと他人は笑う。小さなすれ違いだが、こうなってしまうと、長期戦の収め方がわからない。

夫の山辺稔は銀行員で、中規模支店の課長をしている。人を押しつけてまで出世したいと考えるタイプではない。だが、三十代に入り、お客さんとのやりとりが、楽しくなったと話している。仕事に打ち込む面白さを実感しているようにも見える。

銀行業務はハードだというイメージがあるが、ひと昔前ほど残業は多くない。労働状況に関しては、厳しく監視される世の中だ。

ところが先月半ば、金融庁の検査が、エリアのどこかに入るといふ情報があり、状況は一変した。それが、そもそもの始まりだった。

ありのままを見ていただくとは建前で、様々かたづけをして、整理し、すっきりさせる必要があるのは、どこの職場でも同じだろう。

それからは毎日毎日検査準備で、帰宅時間がぐんと遅くなった。残業するなと言われても、それではすまないことも多々ある。

三十四歳、中間管理職の稔に、あちこちから種々多様な雑務が回ってくるのは、容易に想像できる。二人は職場結婚だったので、当然未央も元銀行員だ。検査の大変さは十分身に染みている。

独身時代、未央の机の鍵が壊れかけているのを、金融庁のおじさんに見咎められたことがあった。

見るからに慥無礼なタイプの人で、やけに幅広のブランドネクタイをしていた。きっとバブルに一步足を踏み入れたころ、空港の免税店で買った物(想像だが)にちがいない。景気のいい思い出がいっぱいで、その頃のブランド品は捨てられない(あくまで想像にすぎないが)のだろう、などと考えながら注意を聞いた。

「印鑑など大切なものが入っているのだから、鍵がこのような状態では……」

結構しつこく言われた。

(みんな気がついてるんだけど、女子行員の机の鍵なんて後回しなの。忙しいのよ。予算だって限りがあるし。そこまで言うのなら新しいの買ってほしいものだわ)

心の中で毒づきながら過ぎ行くのを待った。

「今はまだいい方なんだぞ。大蔵省のころなんか、検査準備はもっと大変で夜中までやったもんだ。ほら、題名忘れたけど、銀行員のドラマがあっただろう。あんな感じだったんだから」

ドラマの俳優さんとは似ても似つかない、ぼっちゃり丸顔の支店長が、武勇伝ともつかぬ口調でなぐさめてくれた。彼の頭の中では、あの俳優さんと若き日の自分が重なっていたにちがいない。

稔が入行したのはバブル景気崩壊後、金融庁が定着し、多くの海外支店を一旦撤退させた、さらに後のことだった。

「バブルのあとで採用人数が三分の一だったろう……同期の人数が少なくて寂しいよ。ちょっと前の先輩はウヨウヨいて一大勢力だからなあ」

稔がこぼしたことがある。

未央の入行はさらにその三年後だ。女子行員の正規雇用は大きく減らされており、採用されたのは幸運だったとしか言いようがない。

教員の娘として育った未央は、日々銀行員の激務を見るにつけ、絶対にこの人たちとは結婚するものかと決めていた。教員の娘が、銀行員の妻だというと、おさまりがいいようだが、違う。正反対の世界だ。残業の時間数も、休みの数も、組合の位置づけも。

決めていたはずなのに、いつの間にか稔との交際が始まり、当然のようにスムーズに結婚に至った。どんな忙しい時にもあまり顔つきが変わらない、肩の力が抜けた感じがいいと思った。

おぼっちゃんの多い銀行の中で、そうではない家庭に育ち、よくも悪くもスマートすぎないところがよかった。

長男の隆弘を妊娠したときに退職を決めた。産休を取るかどうか迷ったが日々大きくなるお腹を触っていると、しばらくこの子の成長を見ていたいと決意した。入行して六年目のことだった。

女性課長の島田さんには最初に伝えた。男女雇用機会均等法一期生のような島田さんは、当時珍しく産休後復帰を果たした人だ。道なき道を切り拓いて今に至るが、温厚で静かな人柄だった。

「おめでとう。少し残念だけど、働き方も、夫婦の形もそれぞれで、新しいも古いもないと思うのよ。いつか戻って来てくれたら嬉しいけど」

感謝しかなかった。

そしてその三年後、八か月前に長女の理香が誕生し、パンプスも通勤電車もますます遠いものとなった。

今回のように、検査準備が長引くのは、初めてのことだ。

過労死するようなことはあってはならないが、ときには残業してでもやりとげねばならないことがある。必死で働くことは悪いことばかりではない。よくわかっている。ましてや検査準備は、短期決戦、ゴールの見える闘いなのだ。

だが、夫の労働状況の変化は、思いのほかこたえた。ジャブのようにきいてきた。最初は優しい言葉をかけ、いたわり合ってもいたが、だんだんと夫婦の会話が減った。

理解しているつもりでいたが、一人増えた子どもの世話は、初めての経験ばかりだ。夫の手助けをたのめず、音を上げそうになっていた。

二人の子に食事をとらせ、入浴させる。隆弘を一日家に閉じ込めておくわけにもいかないの、赤ん坊もつれて近所の子と遊ばせる。時には北風の中、公園に行くし、買い物にも行く。掃除、洗濯、食事は、増えることはあっても減ることはない。

日ごとに稔の帰宅時間は遅くなり、ゴールは見えているはずなのに、抜けられないトンネルに入ったかのようなようだった。子どもの様子を話すこともままならない。食事と入浴をすませると、布団に倒れ込み、数時間後にはまた出勤する。その繰り返しだった。

理香は夜泣きがひどく、未央の頭は常にぼうっとしている。家事は二の次になった。

「うちの旦那が、『山辺さんのご主人、あんなに毎日遅いのはおかしい』なんて言うの。『山辺さんは、あなたとちがうから』って言ってやったわよ」

隣家の多田さんが豪快に笑った。長男同士が同い年なので、家族ぐるみで親しくしている。

多田さんのご主人は中学の先生だ。そうだろう。学校の先生は厳しい仕事だが、想像しうる残業には限界があるからなあと、未央は苦笑した。

そんなとき、理香が嘔吐下痢症にかかった。

水便と嘔吐が止まらず、一日中おむつ替えと着替えに追われ、洗濯が追いつかない。病院に行き、点滴と薬でようやく落ち着いた。

安堵したのもつかの間、翌日には未央自身、嘔吐が止まらなくなった。おそらく理香の世話をしている感染したのだろう。一晩中嘔吐を繰り返し、朝起き上がろうとしたが、体が動かない。人間、立ち上がれないことがあるのだと、初めて知った。

「——動けないの、本当に。仕事、なんとかならない」

「ごめん……今日は無理だ」

ネクタイを締めながら、稔はそう言って、目をそらすように出て行った。

今まで知らない、冷たい顔に見えた

せめてタクシーを呼ぶとか、お隣にお願いするとか、何か手を貸してくれてもよいのではないか。何しろ本当に体が動かないのだから。

かたわらで理香が激しく泣き、隆弘が、ねーねー、おなかがすいたと繰り返している。未央は動けないまま途方に暮れた。

それからひとことも夫とは口をきいていない。

結局その日は、隣の多田さんが病院までつれて行ってくれた。その間、はず向かいの内藤さんが、子どもたちを見てくれた。

もつべきものは、頼りになる借家仲間である。感謝してもし足りない。

——それにしても、あれから、ごめんもないなんて。

稔の心の声は手に取るように聞こえる。自分だって忙しい。ギリギリでやっているのだ。不機嫌な顔ばかり見せるな、と言いたいところなのだろう。だけど未央は折れることができない。

——夫婦なんてしょせん他人だ。

なんかちょっと獰猛な気分になる。ジャンキーなものが食べたくなる。

大体、稔はいつも先にあやまってきた。未央に非があり、その上、勝手に怒っているだけのときも、いつだってすぐに、「ごめん」と言ってくれたではないか。「ちゃんと話して解決したいのに、とにかく『ごめん』で終わらせようとするの。それ、腹が立つときがあるのよね」

父が生きていたとき、他愛のない会話でそんなことを話した。

「男はとにかくあやまるのが大事だ。先にあやまる男の偉さは未央にはわからん。なあ稔さん」

父は茶目っ気のある口調でそう言って笑った。

「まあ！ わたしがいつもお父さんにあやませてるみたいに言って」

母が少し不満そうに口をとがらせると、稔はうれしそうにビールを空けた。

なつかしくて、なんだか目の奥がきゅっとなる。

今日は、今年最後から二番目の日曜日だ。来週の今日は大みそかだ。いつもなら絶対に大掃除をしている。

朝食のかたづけをしながら、今年は無理かもしれないと、未央はため息をつ

いた。一見きれいにしているが、よく見ると、あちこちごまかせない汚れが目につき、気が重くなるのだ。

見上げると換気扇が黒い。流しのステンレスもくもっていて、とてもあと十日足らずで、新しい年を迎えるなんてできそうにない。

小さな借家だけど、どんなに忙しくても、年末の大掃除をしない年はなかった。それは約束したわけでもない、夫婦の不文律のようなものだったはずだ。

子どもころと比べて、暮れの風景も変わってきた。

この時期になると、あちこちで窓をみがき、網戸を洗っている光景が見られたが、ここ数年、目にすることが少ない。多くの人が、年末ぎりぎりまで働くようになったからかもしれない。

先日購入した雑誌には、『大掃除ではなく小掃除を』という特集が組まれていた。日頃から気づいたところを小まめに掃除しておけば、大掃除は必要ないということらしい。それはそうなのだろうが……。

実家の大掃除は、段取りが決まっていた。父が換気扇やサッシを洗い、母が台所をみがく。その間に未央は姉や弟と、子ども部屋をかたづけるのだ。それから障子を張り替え、あちこちきれいになったら、最後に全員でするのはワックスがけだった。

「集合！」

父の声に子どもたちが集まる。父は中学校の教員だった。そうやって号令をかけるのは、職業病みたいなものだったが、皆嫌がらずに従った。

さほど大きな家ではないが、台所と、座敷の囲み縁だけは、ピカピカにしたかったのだろう。

黄色い容器に入ったワックスを、父が少しずつ撒いて、それを子どもたちが布でのぼしていった。正しいやり方かどうか未だにわからないが、きゃあきゃあ言いながら、結構楽しい時間だった。

時にはワックスをかけたところに囲まれて出られなくなり、足跡をつけてしまうこともあったが、笑い話になるだけで、叱られることはなかった。

「すべるから気をつけるように」

ワックスを塗り終わった廊下は誇らしいくらいピカピカで、正月が待ち遠しくてたまらなくなったものだ。

やはり、このままではいけない。

未央は意を決して、三段の足踏み台を運んで来た。そしてその上に乗り、背伸びをして、換気扇の羽を取り外した。下から見ているより、ずっと汚れてべとべととしている。

炊事場だけでもすっきりさせて、新しい年を迎えたい。一人でもやる。もうあてになどしない。

未央は粉石けんを湯で溶いて、換気扇の部品ひとつひとつに塗り始めた。茶色い油が爪の中に入ってくるが、作業を始めたことが心地良かった。

いつも大掃除の指揮をとっていた父は、二年前、ガンで他界した。初孫の隆弘を抱いてもらえたのが、最後の親孝行だった。

換気扇をみがき、流しのステンレスをみがいていると、未央は父を思い出してならない。母と交代で病院に通い、着替えを届け、洗濯や氷枕の交換をしたのに、なぜか悔いばかりが残ってしかたがないのだ。

ある光景が浮かんで苦しくなる。

その日は、いつものように父の衣類を、病院の洗濯機で洗ったのだが、取り出してみると、洗濯物全てに真っ白な膜が貼りついていて、ティッシュペーパーをパジャマのポケットに入れたままにしている、それを確認せずに洗濯してしまったのだ。

たまにある失敗だが、病院内のことでもあり、洗い直すには、新たに洗濯機の順番を待たねばならなかった。共同の洗濯機をきれいにしなければと、そのことも気が重かった。着替えが足りなくなり、父が気を揉むのではとも考えた。

父の病状は良くなく、切羽詰まった状況が続いていた。そばにいる未央まで些細なことに気持ちが振れた。今にして思えば、疲れていて、どこかおかしくなっていたような気がするのだ。

「ごめんなさい。これからはちゃんと確認するね」

それが言えなかった。

父は本来、洗濯ぐらい自分でさっさとする人なのだ。そしてちょっとばかり毒舌で意地っ張りだった。なのに、日ごとに弱っていくようで急に切なくなった。優しい言葉ばかりを口にすると、ますます弱るようで、余力が残っていないのを認めてしまうようで、少し悪態をつきたくなった。

だけど、いろいろ分析しても、あ那时的自分の気持ちや悲しさは、どこか説

明が見つからないのだ。

「お父さん、しっかりポケット確認してね」

わざと冗談めかして、ぶっきらぼうな言い方をすると、父は少し淋しげな顔をした。初めて見る表情だった。

なぜもっと優しい言葉が言えなかったのだろう。そして、なぜ今になって、こんな小さなことを、大きな悔いのように感じるのだろう。もっとあやまらなければならぬことは、あったのかもしれないのに。

換気扇の羽をすすいで、ステンレスが光り始めると、また目の奥がきゅっとして、ちょっとこらえられない。

突然、よく寝ていた理香がぐずり始めた。思い出したように隆弘もまとわりついてくる。

「おなかすいた」

子どもという生き物は、一日中お腹がすいたか、のどがかわいたかのどちらかである。その隙間に排泄と、睡眠と、遊びたいが、びっしり詰まっている。そして、そのどれもが自分では解決できない。こんな大人がいたら総スカンだろう。

「お昼までがんばろうね。あと少し」

隆弘をさとして、理香の授乳をすませることにした。離乳食を嫌がることはないが、完全離乳はまだまだ先のことだ。

その時、奥の部屋から稔が出てきた。黙ったまま外に向かい、がたがたと音をたてている。見ると、仏頂面でサッシと網戸を外し、外で洗い始めた。

「ぼくも」

隆弘が嬉しそうにサンダルで飛び出し、今度は稔にまとわりついている。

二歳児でも、最近の両親の様子には、心を痛めていたのかもしれない。声を荒げていたわけではないが、居心地の悪さをしっかり味わわせてしまった。

それにしても、夫の態度は感じが悪い。未央の気持ちは晴れない。

不思議とどんなに寒い年でも、年末に一日だけは家族がそろそろ、暖かく晴れた大掃除日和の日がある。子どものころから、その日に恵まれなかったためしがない。

そして今年は、今日がその日だ。なんだか夫婦の間はぎくしゃくしたままだが、とにかく少しはきれいにして年をとることができそうだと、少し安堵した。

しばらくすると、鼻を赤くした稔と隆弘が入ってきた。晴れて暖かいとはいえ、水仕事はやはり冷えたのだろう。

「おわったよー」

二歳児は自分の手柄のように得意気である。

「ありがとう、助かったよ……おひるごはんにしようね。おにぎりでもいい？」

隆弘が跳びはねる。喜びの舞といったところだ。言語を持たない時代の人類は、こうしてわけのわからない踊りで喜怒哀楽を表現していたのだろう。そして、現代でも男はあまり言語能力においては、進化していないと往々にして感じる。

ピカピカの流しの前で食べる真っ白いおにぎりは格別だ。

「……玄関と、この部屋、ワックスかけとくから」

稔がぼつりと言う。小さな借家だから、ワックスをかけるのは、小さな玄関と小さなダイニングだけだ。なんとなくそれも毎年続けてきた。

「——ごめん」聞き逃しそうな声で言い、こっちを見ている。

「もっと早く聞きたかった」

「ごめん。余裕がなかった」

「私も悪かった……ごめんなさい。わかってはいるんだけど、二人抱えて病気したら余裕なくなって」

「わかってる、ごめん」三度目だ。

お互い簡単なことなのにと、おにぎりをほおぼる。だからといってあのときどうするのが正解だったのか、よくわからない。あの日、稔は仕事を休むわけにはいかなかった。

だけどお互いもう少し余裕があれば、優しい言葉をかけ合えることはできたかもしれない。そうしたら、何か少しは知恵を出し合えたかもしれない。

「あのさ……おせち作らないなんて言わないよね。黒豆と数の子くらいは作ってくれるよね……」

だからあわててあやまってきたのか。ほんとに調子がいい。

「それで急に頭下げてきたわけ？」

「違うよ！ ずっとあやまっていたんだ。不機嫌なままなのは疲れたし……」

「……そうね、私も。わかった、おせちは作る。黒豆と数の子だけでいいのね」

「あと伊達巻と、昆布巻き、田作り、きんとん、お煮しめは里芋増量でね」

「なに、全部じゃない」やっぱり調子いい。

家中きれいになったら明日は商店街に買い出しに行こう。そして週末には黒豆を浸しておこう。まだまだ今からが忙しくなる。

日頃からきれいにしていけば大掃除はいらないのかな、未央はまた考える。違うような気がするのだ。大掃除は家事の一環ではないような気がする。家族の一年に一度の大きな行事だ。日々の掃除とは一線を画する祭事といえば大げさだが、全員でやらねばけじめがつかない、そんなものだ。

「集合！」と号令をかけていた父の姿が浮かぶ。

きっと嬉しかったのだろう。小さくても自分の家を家族でみがき上げ、一年を締めくくることが。

大掃除が終わるころ、いつも母はおせち料理にとりかかっていた。父は必ず数の子をつまみ食いして、毎年言った。

「うまいなあ。こんなおいしいものは正月だけじゃなく、一年中食べたらいのにな」

そして、また一年間数の子が食卓に登場することはなく、また次の大掃除後に、同じセリフを言ったものだ。

さっきまで、父への後悔ばかりが湧き上がってどうしようもなかったのに、少しずつ気持ちが晴れているのを未央は感じていた。

大掃除は家族総出の行事だ。やっているうちに暮れの華やかな気分が湧いてくる。いつもは背中を向けていても、誰かが欠けても、ほかの家族が続ける。

今こうして稔と未央が手を動かしながら、何となく口をきき始めたのも、その繰り返しが背中を押している。

高校生の頃の未央は、短く強めの反抗期に入り、それなりに脱線した。

親と口をきかずにすむ方法ばかりを探し、こっそり授業をさぼり、部活をさぼり、心配した担任に呼び出された。友だちと心が離れて、誰とも通じ合えないような思いで生きていた。みんな嫌いだった。

中途半端なボリュームのルーズソックスをはいてみたり、似合いもしないのに眉を細くしてみたり、それがまたへたくそで、思い出すだけで恥ずかしい高校時代だった。なのに、やっぱりその年も、眉毛のない仏頂面でワックスをかけた

のだ。笑える。

父の人生は、娘が悔やむようなことばかりではなかった。きっとそうだ。

ルーズソックスを処分し、やっとなら受験勉強を始めた未央に父が言った。

センター試験は三か月後に迫っていた。

「受験勉強でも始めたか」

「まあね。S大くらいなら間に合わせるから」大風呂敷だった。

「蠅螂の斧だな」

「何それ」

にやりとした父の顔が忘れられない。

広辞苑をひくと、『自分の微力な力量をはからずに強敵に反抗することで、はかない抵抗のたとえ』とあった。ひどい！

かまきりが前足を振り上げて、大きな車に立ち向かう話に基づくことわざらしい。やっとなら受験勉強に茶々を入れた父は、いたずら坊主のような顔をしていた。

素直じゃないのはお互い様だった。

言えよよかったこと、言わなければよかったこと、たくさんありすぎて、ひとつひとつ思い出すと泣きたくなる。わーっと叫んで、そこに戻ってやり直したくなる。

「反省はしても後悔はするな」と誰かがテレビで言っていた。

立派だ。立派過ぎて自分には到底届かない生き方だと未央は思う。

自分はこれからも、小さな悔いを、落ち葉のように重ねていくのだろう。だけどその中のどれかは、あとで笑えるものになって、自分を後押ししてくれるかもしれない。

ようやく乾き始めたサッシを、稔が窓枠にとりつけている。少し水の筋が残ったガラスが眩しい。

来週には新しい一年が始まる。

〈了〉